

「ローマの平和」とキリスト教

——二世紀における帝国と教会——

序

本論文の意図はキリスト教の急速な拡大を可能とした二世紀における帝国と教会との関わりを対立と葛藤からではなくむしろ協調と融合の側面から眺め、「ローマの平和」期がキリスト教にとっても恩恵であったことを論証し、併せて正統教会と異端・分離派の争いの背景に在る二世紀の帝国の持つ積極的意義について言及することにある。

(一)

「ローマの平和」とキリスト教

約半世紀前、スウェーデンのルター派神学者カール・ニーグレンはアガペーとエロースの理念を用いてヘブライズムとヘレニズムの流れを分析し、古典古代期は両思潮の対立の時代、つづく中世ヨーロッパ世界は両者の融合、カリタス理念の時期、これに対し近代の幕開けとなったルネサンスと宗教改革はヘレニズムとヘブライズムが再分離し、本来あるべき位置に復帰した時期とみなし、とりわけ宗教改革の意義を鮮明にした^①。それはキリスト教の世界宗教化に際して果たしたヘレニズム文明の役割を積極的に認め、逆にそのヘレニズムからの決

別による純粋なヘブライズムの回復としての宗教改革運動の本質を追求したものであり秀れた論考と言える。

しかし古典古代期におけるヘブライズムをヘレニズムと対等の位置に置いて論ずるニーグレンの発想には問題があるであろう。キリスト教の誕生・形成・拡大の全プロセスが展開する舞台としての世界国家ローマはヘレニズムの遺産を継承した高度な文明世界であり、その中であってユダヤ教・キリスト教から成るヘブライズムの思潮は小さな流れにすぎなかったからである。「歴史の父」とされる前五世紀のヘロドトスの『歴史』の中にユダヤ教への言及が無いのはオリエント世界の大国を視野におく彼の立場から見て当然と言えるかもしれない。しかし一世紀のローマの代表的博学者プリニウスの手になる百科事典『博物誌』の中にキリスト教は無論のことユダヤ教についてもほとんど言及が無いことには驚ろきを禁じえないであろう。『博物誌』の中でプリニウスが触れているのは魔術の項目でモーセが魔術師であったこと、不思議な性格を持つ河川・泉の項目でユダヤに安息日ごとに干上がる川がある事だけである^②。

ローマ人で始めてキリスト教徒の存在について触れたのは歴史家タ

新 田 一 郎

キトウスである。しかし「ネロの迫害」として知られる放火の罪を「キリスト教徒」に転嫁したと記す『年代記』^④は二世紀になってからの著作であり、この事件が生じた六四年直後の同時代の作品ではない。タキトゥスとはほぼ同時代のいま一人の歴史家でネロのキリスト教迫害に言及したスエトニウスの作品も同じく二世紀のものである。その上、放火罪は濡衣としながらもキリスト教徒は「人類憎悪の罪」で処刑は当然としたタキトゥスと、単に「危険な迷信」とし、ローマ市の大火と切り離しているスエトニウスとの間には記述の上で大きな差がある。しかしこれは二世紀の時点で両名が知見したキリスト教の理解度・関心度の差に由来するものであり、いずれも六四年当時のキリスト教徒の実際の姿の説明ではないであろう。同じ二世紀の歴史家でギリシア語でローマ史を叙述したディオカシウスが六四年の大火をネロと結びつけ多くの頁を割いているがキリスト教徒には全く触れていない点に注目したい。またタキトゥスの『年代記』には処刑に際しキリスト教徒は野獣の皮衣を着せられた^⑤、とあるが、ディオの『歴史』では皮衣を着たのは皇帝ネロであり、それは獣姦のシーンを創出する演技の一環であったと記されている^⑥。野獣刑施行の際のルールから言ってもタキトゥスの叙述には問題があるであろう。いずれにせよキリスト教の存在に直接言及したローマ側の史料は一世紀には無かった。重要なことはこれがローマ側の認識不足・不注意に由来するといふよりはキリスト教自体の未形成に原因があったことである。むしろ六四年のローマ市の大火と連動する「キリスト教徒」迫害は事実であろう。しかしタキトゥスに見られる凄惨な光景の描写はネロへの弾劾と、二世紀の時点で彼が知見したキリスト教に対する不十分な知識と

偏見に由来する部分が多く見られる。またこの時、放火犯の嫌疑で処刑されたとされる「キリスト教徒」がどの程度ユダヤ教徒集団と区分されていたかについては必ずしも明確ではないように思われる。なぜなら六四年前後のキリスト教徒は依然としてユダヤ教の中の一分派であり、その構成員は主としてユダヤ人（教徒）から成る集団にとどまっていたと考えられるからである。スエトニウスの『皇帝伝』クラウディウスの治世に見える「クレストスと呼ばれる人の煽動でユダヤ人が度たび騒ぎを起し、その状況の中でかれらがローマ市から追放された^⑦」という叙述はこの間の事情を物語っている、と言える。この叙述はスエトニウスの誤記（クレストスがクリストスとあれば彼は紀元三〇年前後、十字架刑で処刑されている）の部分もあるが、ユダヤ教内の一分派時代のキリスト教の性格を垣間見させてくれるからである。ネロ治政の晩年にあたる六〇年代のキリスト教はなお揺籃期にあり母なるユダヤ教とのつながりは大きかったのである。

我々はここで『新約聖書』の中核部分を構成する四福音書が最も早いマルコ伝で七五年頃、最も遅いヨハネ伝は九〇年代になって始めて編纂されていることに目を向けるべきである。使徒パウロが元来ディアスポラのユダヤ教徒であり、イエス・キリストの福音の宣伝にあたりながらも一貫して母なるユダヤ教へのこだわりを見せていることに留意すべきである。キリスト教の指導者としての彼の存在をユニークなものにした要因はむしろ彼が親の代からローマ市民権をもつローマ世界の特権層に属していたことと関連する部分が強い。皇帝への上訴とそれに伴う護衛兵つきでのローマ旅行は同時にまたとない伝道旅行の機会となつていたのである。

それではキリスト教が明確に独立した宗派としてユダヤ教徒集団から独立し、かつ急速な伸びを示しつつ、結果としてローマ人の関心を呼び込んだのはいつ頃であったのであろうか。それは端的に言ってトラヤヌス治下の二世紀初頭と言ってよいであらう。我々はその第一級の史料をプリニウス（『博物誌』の著者プリニウスの養子）のトラヤヌスに宛た書簡の中に見い出すことが出来る。彼は自らが総督として統治した小アジア・ビテュニア州のキリスト教の情況につき次のように述べている。「あらゆる年齢、あらゆる階層そして男女大勢の者がこの（キリスト教）危険に脅かされ、また脅かされようとしています。町だけでなく村・農地にもこの俗信の伝染病が拡がっています」

と。しかし彼はそのあと続けて、尋問の結果キリスト教徒は、特に危険な存在ではなく、道徳的にも問題のない集団である、という認識に立ちつつ、寛大な対応を採ることでの俗信は払拭しうることを皇帝に報告している^⑧。注目すべきはこの一一年発信の皇帝宛ての書簡がプリニウスの言によれば、自分のキリスト教徒尋問が始めてで不明な点が多いとし、皇帝に指示を求める内容となっていることである。プリニウスの書簡はかくしてキリスト教徒が新興の集団であることを示す史料として受けとめることが可能となる。この間の事情はやや後代のものとなるが教会側の文献からも確認しうる。例えばカルタゴ教会の長老職にあったテルトゥリアヌスは一九八年執筆の『護教論』の中で「キリスト教はつい昨日生まれたばかりである。しかるに大都市、アパート、城塞、帝国都市、公共広場、都市参事会、王宮、議会、市場などには全て多くのキリスト教徒がいる。キリスト教徒のいない場所は神殿だけである」と述べている。むしろプリニウス、テルトゥリ

アヌスの記述には誇張があるであらう。古来の伝統的宗教の復興の可能性と、その成果を強調しようとするプリニウスにとってキリスト教の滲透の度合は当然強調されねばならない。他方、帝国とそれに対立する来たるべき神の国のモデルとしての教会の担い手を自負するテルトゥリアヌスにあっては当然教会勢力は強調されねばならないからである。しかしこの二つの記述は共に二世紀以降、順調な発展・拡大を遂げていくキリスト教集団の姿の一端をとらえているものとして受けとめることが可能である。キリスト教は一世紀から二世紀への移行期を契機として真に歴史的存在になったと言える。ではこのような情況はどのような背景の下で可能となったのであろうか。

言うまでもなくそれはキリスト教側の主体的な運動というよりは背景としてのローマ帝国側の情況の変化の下で生じたものであった。紀元百年前後の帝国に生じた大きな変化としては先ず一世紀の帝政期を特徴づけた世襲王朝の終焉、養子制の導入がある。これにより最高指導者は最も秀れた者、最もふさわしい人物によって担われるという慣習が確立され、それが「ローマの平和」の完成につながっていく。しかし同時に重要なのはこの世紀の転換期がドミティアヌス帝の恐怖政治の終焉、そしてネルヴァの登場に始まる新時代に当たっていることである。言うまでもなくドミティアヌスは「主にして神 *dominus et deus*」と自称して自己を神格化し、臣下に対し拝跪の礼を強制した暴君である^⑨。それは元老院によって死後、善帝と判定された皇帝のみが神格化される、というローマの皇帝崇拜の原則を真向から否定するものであり人々の輿論と拒絶反応を招く行為であった^⑩。その上、ドミティアヌスは自己の神聖を汚し批判する者をスパイを用いて探索し、違

反者を不敬罪・無神論の罪を犯した者として処罰している。例えばデ・イオの記述によると、一婦人は皇帝の肖像の前で着替えをしたことで尋問をうけ処刑されている。^⑧ 皇帝の像が公共の建物に限られず、個々の家にも置かれていた事情が判明する。このようなローマ本来の慣習を脱した皇帝崇拜の強制の下、ユダヤ教徒・キリスト教徒が苦難を体験するのは当然である。その余りにも厳しいローマ帝国批判もあり新約聖書の正典の一書になるのが遅れたとされる「ヨハネ黙示録」がこの時代の作品であったことに注目すべきである。ここでは神の国の到来につながるローマ帝国の終末は、近いながら未来の出来事とするパウロ流の終末論^⑨は消え、ローマの解体は現に生じている、とする立場が披瀝されている。「大いなるバビロン（ローマ）は倒れた。その不品行をあおる酒をあらゆる国民に飲ませた者……大いなるバビロン・淫婦どもと他の憎むべき者らとの母……」はその一例である。

言うまでもなくローマ帝国が存在する世界国家の最後の帝国であり、このローマ帝国の終末のあと始めて完璧な理想国・神の国が来るという発想は前二世紀半ば以降のユダヤ教の聖典、旧約聖書の予言書に見えている。^⑩ しかしこの終末論は新約聖書の諸書の中で更に鮮明化していく。四福音書^⑪、パウロの書簡として使徒行伝^⑫にもその叙述の根底に終末論がある。しかしローマの終末を完了形で叙述したのはヨハネ黙示録のみである。しかもこの終末論の絶頂期にあたる一世紀末の時代がヨハネ黙示録として第四福音書としてのヨハネ伝の著述の年、キリスト教の実質上の成立期に当たっていることに留意する必要がある。端的に言って、終末の前兆としての迫害者ドミティアヌスの出現、それに伴う苦難の教会という関係が新約聖書の中心書の作成期

と重なっていたのである。このことはキリスト教運動が期せずして迫害に抗する運動、殺されるが殺さない、という殉教型の無抵抗の抵抗運動として発足したことを意味していた。

しかしローマ皇帝の中でもカリグラ、ネロという少数派に属するタイラント型の皇帝ドミティアヌスが失墜し、老齢のネルヴァが登場すると状況は大きく変化する。彼が即位と共に先ず行なった事はこのドミティアヌスの恐怖政治の払拭であった。元老院が死後裁判によって彼に「記憶の抹殺刑 *damnatio memoriae*」を宣告し、彼に関わる勅令・指令の無効、そして肖像（ローマ市にあったものは金・銀製であったという）の撤去、碑文からの名称抹殺などが先ず実行に移された。^⑬ 彼に捧げられた神殿は父のヴェスパシアヌスに奉獻された。彼は元老院により「神君 *divus*」の称号を定め神格化を受けていた皇帝であった。ほぼ同時代の叙述と言いうるディオカドミティアヌスの治世について述べる次の記述は迫害に関わる部分があるだけに極めて重要である。「同じ年（九六年）ドミティアヌスは多くの人々と共にコンスルであったフラヴィウス・クレメンスを殺した。彼は皇帝の従兄弟であり、また彼の妻フラヴィア・ドミティルラも皇帝の親族であった。クレメンスに対する罪は無神論という罪であった。そしてこれと関連してユダヤ人の慣習におち入っていた多くの者が有罪とされ、或る者は死刑にされ、他の者は財産を奪われた。ドミティルラはパンダテリアに追放された」^⑭。

一方、ネルヴァの治世の冒頭の部分の叙述は次のようになっていく。「ネルヴァは無神論・不敬罪で起訴されていた者を釈放し、迫害者を復帰させた。……そして何人も無神論ないしユダヤ人の生活慣習

を採用している、という理由で告発することを禁じた。密告者であった多くの者が処刑された^⑤。

紀元六四年のローマ市の大火災事件に際しキリスト教徒に言及しなかったディオは、ここでもキリスト教について直接的に触れていない。また弾劾された「無神論者」が皇帝崇拜の拒否と関わる場合もあるが、ここにあげた双方の記述に見られる「無神論」と「ユダヤ人の生活慣習の採用者」がベアーで使用されていることから推して、当該者がユダヤ教徒ないしキリスト教徒と関わりを持つ集団であることは間違いない。更に言えば、この用語が紀元七〇年まで続いた第一次ユダヤ戦争後のものであることを考えると、その当該者がキリスト教徒を指している可能性が極めて高い。なぜならユダヤ戦争後のユダヤ教徒はかつてのエルサレム神殿税に代る二ドラクマ税の納入と引き換えに礼拝の権利を保持していたからである^⑥。年に一人あて二ないし三分程度の賃金に該当する額の納税で彼らに保証されていた権利を自ら放棄するような行為は考えにくいであろう。彼らには国土がなく、宗教としてのユダヤ教が民族結合の唯一の絆であったことを想起すべきである。ディオの記述にはキリスト教徒という語が見えていない点でなお問題は残される。しかしドミティアヌスの恐怖政治の払拭を意図したネルヴァの布告が結果としてユダヤ教徒とくにキリスト教徒にとって恩恵となったことは間違いない。この間の事情は次くトラヤヌス、ハドリアヌスそしてピウス帝の治世になると一層明確となる。

先ずトラヤヌスであるが彼の立場はキリスト教徒の措置をめぐる指示を求めてきた前述のビテュニア州総督プリニウスへの回答書の中に見出だされる。皇帝はここで寛大な対応がキリスト教徒を俗信から伝

統的宗教へと引き戻す上で効果的、とするプリニウスの要請を肯定しつつ、キリスト教徒は探索の必要がないこと、匿名の告発は採用すべきではないことを指示し、とくに後者の項目に関連させ、かかる方式は「我々の時代にふさわしくないから」としている。トラヤヌスの指示はこれだけではない。彼は更にキリスト教徒の取締り規定の問題に触れつつ「あらゆる場合に適用可能な罰則を制定することは不可能である」との立場を表明する。余りにも簡潔な皇帝の返書にはその理由について言及していない。しかしそれはキリスト教徒の急増に伴なう信者の混集合団化と、そこから来る信条・行動方式の多様化を意識した発言と見なしてよいであろう。明言はないが、「彼らが告発をうけ、有罪が確認された時は、処罰されるべき」とする文言は、個別的な形式の尋問が必要であることを示すものと言える。コンスタンティヌス帝時代の著作ではあるがカエサリアの司教エウセビオスがその『教会史』の中で、二世紀初頭のキリスト教の盛況に触れ、「イエス・キリストへの信仰が全人類の間で盛んとなった」と述べるかたわら、「真理の敵対者」である種々の異端の発生に言及しているのもこの間の事情の傍証となる^⑦。

続くハドリアヌスの布告はキリスト教にとって更に恩恵的なものとなる。彼はここで署名入りの告発であっても妄に他者を告発する乱訴の弊害に注目し、かかる場合は告発者である原告が有罪となる旨、指示している^⑧。そして次のピウス帝になると、かかる乱訴の折は告発者が有罪となるだけでなく、被告がキリスト教徒の場合であっても釈放すべきであるとしている^⑨。ハドリアヌス、ピウスの指令によるとキリスト教徒が有罪となるのは「法に反したこと」、「帝国に対して陰謀

を企てている気配が」確認される場合だけに限られている。それはドミティアヌス帝の下で生じた幣害というべき「名そのもの *nomen ipsius*」で有罪という発想、タキトゥスの言う「人類憎悪 *odium humani generis*」の罪という法治国家では在ってはならぬ罪状の否定を意味するものと言って良いであろう。この点ブリニウスの友人であり同じく小アジアの属州アジア州の総督（一一二—一一三年）の経験のあるタキトゥスが、ブリニウス同様、多分この期間に知見したキリスト教運動を「人類憎悪」の罪に値する集団と解釈し、あまつさえ、この解釈を六四年の事件に投射させたことは行き過ぎと言えるであろう。恐らく岳父アグリコラに対するドミティアヌス帝の不当な処遇とも連動するであろうが、タキトゥスには皇帝と帝政全般を批判する態度が鮮明に確認される。この点でキリスト教徒の処罰に見られるネロの残忍な行為の描写には単なる誇張を越えるものがあると考えられる。またネロの迫害もさることながらキリスト教徒もそれに値する破廉恥集団とする発想にはアプリアリナキリスト教への軽視・憎悪があり批判さるべき記述とみなすべきである。「ヨハネ黙示録」に見える七つの教会エペソス、スミルナ、ペルガモン、テアテラ、サルディス、フィラデルフィア、そしてラオディケアは全て小アジア地域の都市であり、またこの地域はキリスト教運動の先進地でもあった。ブリニウスと同じくタキトゥスもこの小アジアの地で総督として勤務した二年程度の期間に始めてキリスト教徒と出合った筈である。しかしブリニウスとタキトゥスのキリスト教徒に対する対応には大きな差があった。総督としての使命観が旺盛であり、また義父の影響と思われるが万事において探究心が旺盛なブリニウスは、徹底的にキリスト

教運動の性格につき知見を拡めた。そして彼の記す所に依れば「常规を逸した俗信」ではあるがそれ以上のものではないと結論づけ、為政者側の寛大な対応により、この俗信の鎮圧は可能と見なし、またそのことをトラヤヌスに伝えた^④。しかしタキトゥスにはそのような努力の跡は認められない。そのうえ、歴史家として彼は自らの不十分な知見に基づく偏見あるキリスト教徒像——人類憎悪の罪という解釈を六四年のローマ市大火の事件にも投射させた。彼のこのような態度は帝国・教会双方にとって不幸であったと言わねばならない。しかし幸いにして、タキトゥス流のキリスト教徒像は彼個人にとどまり、大きな影響は無かったようである。トラヤヌス、ハドリアヌス、ピウスと時代を経る中で示されたキリスト教徒に対しても法治主義の原理を適用する態度は教会にとって恩恵となった。信徒は急速に増大していく。E・ギボンの言う「人類史上、最も幸福にして繁栄せる時代^⑤」とする二世紀は、ギボンは意識していないが、キリスト教徒にとっても恩恵であった、と言ってよい。

紀元一五四年、A・アリストイデースはローマ市で演説を行ない、この時期を「戦争があったことは、最早信じられなくなり……人類が永遠の休息の中にある」時代、「争いの全ての原因が都市から死滅し……全地が楽園の如きものとなった」世界とし、また「力ある者、高貴な心を持つ者、熟練した者」要するに努力する者全てに「市民権が開かれ」、「共通のデモクラティアが一人の人、最善の支配者の指導の下で確立した」世界としている^⑥。演説というスタイルから言ってみるに誇張はあるであろう。しかしそれは歪曲ではない。「ローマの平和」は完成の域に達した、と言ってよいであろう。帝政に批判的なタ

キトゥス自身がこの時代を「感じたことを思うままに言うことの出来る稀なほど幸福な時代^④」と記していることも参考になる。

当然ながらこの完成度の高い「ローマの平和」がキリスト教に与えた影響は深甚であった。それはキリスト教の出発点を画した一世紀末の根本理念であった切迫した終末意識を大きく修正し、ローマ世界の終末の時点をかなり先の未来の出来事とする上で大きな効力を与えていく。そしてこれがキリスト教への入信を容易にしていく。繰り返しになるが二世紀のローマ世界はキリスト教徒にとっても大きな恩恵的存在であったのである。一般キリスト教徒にとって、ローマ帝国の終末の後に来るとされる神の国を意識し、それに備えるという戦時型生活は短期間なれば可能としても、長期となると困難をきたすこととなる。この点でかかる緊張状態から信徒を解放した良き時代としての「ローマの平和」が果たした役割は極めて大きい。しかしこれは同時に実質上のキリスト教成立期としての紀元一世紀末のローマ帝国を特徴づけていた終末の前兆としての迫害皇帝の登場―受難を介して栄光という図式の大修正・否定につながる背景を出現させている。端的に言ってこれはローマ帝国側がキリスト教会に投げかけた挑戦という性格を持つことになる。受けて立つ教会は当然、すみやかな対応策を樹立しなければならぬ。教会の発展・拡大を可能にしたローマに対しては感謝せねばならない。しかしそれだけではヘブライズムの根本理念である終末論は成立せず、神の国の実現を目指す意図は挫折する。終末論を遠い未来の出来事としてそれを保有する方式も可能である。しかしこの方式には逆に、ローマ帝国が地上における最後の世界帝国であるだけに永遠性に対する信念をローマに与えてしまう危険性があ

る。しかも神の国のモデルとしての教会の構成員間に信仰箇条・ローマ帝国観・対ローマ行動様式の点で、不一致と異論があつてはならない。分派の発生はいかなる犠牲を払っても阻止されねばならない。なぜなら地上国家であるローマ帝国においてすら二世紀に限ればかかる不和はなかったからである。では教会側の指導者ほどのような立場に立ったのであろうか。かれらが提示した基本方針は成功したのであろうか。この問題につき次に章を改め考察したい。

(二)

ユダヤ教・キリスト教運動としてのヘブライズムがヘレニズムの大潮流に対して抗すべくもなかった些細な流れにすぎなかったことはヘレニズムの担い手が世界国家ローマ帝国であったことに目を向ける時、自明となる。キリスト教が世界宗教を意図すれば、当然ローマ世界の中で活動せねばならない。ローマ帝国を存在する世界国家の最後の帝国としてその終末のあと始めて理想国家、神の国が来るとする理念、そしてそれに付随する皇帝崇拜を含む多神教世界への抵抗という方式はいずれもローマ帝国に収斂されるヘレニズム世界に対抗する中で自らの普遍的性格を蓄積する運動として理解することが出来る。このような方式はキリスト教成立時の一世紀末においては十分に効力を発揮しえた。ドミティアヌスの恐怖政治と常規を逸した生前の皇帝崇拜の導入がその条件を充たしていた。しかし前述の如くネルヴァに始まる世紀転換期以後、情況は一変する。そこにあっては出身・国籍等を問わず優秀者が市民権を得て支配層を構成し、「共通のデモクラティアが最善の支配者としての皇帝の下で樹立された^⑤」世界が登場す

る。それは「優秀者支配」を説いたプラトンの理想国家が世界的規模でまがりなりにも実現を見た時代である。ローマ世界を欠陥国家、近い将来、先行する世界国家バビロニア、ペルシア、アレクサンドロスとそのディアドコイの国と同じく消滅する国家とするヘブライズムの主張とは全く異なる情況が登場したのである。このような中であって教会にとって解決が急がれた問題点は、急速に拡大した教会構成員の一致と結合を保持しつつ、他方では出発時に保有していた終末論に立つ受難の教会の理念をどのようにして現情と調和させるか、ということであった。

この問題の解決を意図し司教会議が召集されたことを暗示する史料はない。エウセビウスの教会史にも言及はない。しかしこの間の事情を知る上で重要な史料がある。それはアンテリオキアの司教イグナテイウスの書簡である。彼の書簡は使徒パウロの例にならない、各都市の教会宛てとなっているが、実際は教会を代表する司教がその受理者であったであろう。書簡はエベソス、マグネシア、トラリア、ローマ、フィラデルフィア、スミルナ及びスミルナ司教ポリュカルポス宛の計七通である。ローマ市を除くと全てが小アジアの都市である点、「ヨハネ黙示録」に見える七つの教会と大方が整合する。恐らくこれはイグナテイウスの意識した選択と考えられる。ではこれら七通の書簡で一樣に彼が指摘した点は何であったのか。それは信徒の指導にあたる司教を中心とする聖職者の立場の重要性を指摘し、その役割を信徒集団の和合と一致の保持と「教会の平和」の樹立に置いたことである。教会構成員の内部分裂、分派の発生を未然に防ぐ事こそが司教が専念すべき最重要事という立場は「ローマの平和」のもたらす恩恵の下、

急速に拡大したキリスト教会の現実の姿を彷彿させるものがある。イグナテイオスが司教として司牧に当ったアンテリオキア教会にも、一時期、分裂の傾向があったことがポリュカルポス宛ての書簡から判明する。

しかし更に注目すべきは七つの全書簡が、アンテリオキアでローマ当局者から逮捕され判決を受けるためローマ市へ護送される過程で書かれたことである。逮捕の理由は記されておらず確認しえないが、宿泊地で書簡を書く自由を保持している。しかも彼は自分の護衛のため同行する十名の兵士（この数は一テント隊八名を越えている）のことを「十頭の豹」と呼んで彼らを迫害者視し、更に自身を「神の穀物」と呼び「獣の歯で挽かれてキリストの純粹なパンとなります」と述べて「神のために死を求める」自分の願いを妨げないでほしいと記す。彼の書簡が護衛のローマ兵から検閲を受けた形跡はない。これは彼が司教であっただけでなくローマ市民でもあったことと関連する。皇帝への上訴のための護衛兵付きでローマ市送りとなっていることもこの事を示している。イグナテイウスはローマ市民として、同時代のタキトウスの言う「感じたままの事を思うままに述べることの出来る稀なほど幸福な時代」としてのトラヤヌス時代のもたらす恩恵の享受者であった。しかし更に重要なことは彼が自らの意志で死を望み、ローマ市で獣の歯にかかって殺されることを望んでいる点である。これは彼が自発的殉教者であったことを暗示するであろう。この解釈に立てば彼が何ゆえ逮捕されたのかという問題も解決する。ネロの迫害下にあつて殉教の死を遂げたパウロ、あるいはドミティアヌスの迫害下で処刑されたとされるヨハネらと異なり、平和な時代にあつて自然死

ではない死を望むとすれば自発的殉教者の道しかない。イグナティウスの望んだ道は明らかにこの道であった。しかし言うまでもなくかかる死に方は直接的な実害をローマ当局に及ぼさぬとしても挑発行為であることは事実であり、問題を残している。その上、自発的殉教は一種の自殺行為であり^④むしろそれを阻止することが司教の使命、という側面があった。イグナティウス自身の明言は無いが、自発的殉教行為には自らの行為を強調するヒュブリスの罪も潜んでいる。アンティオキアの司教として彼はこれらのことを熟知していたと考えられる。彼が望んだことは自らの自発的死で「自発的殉教」行為を封印し、発生が予測されるこの行為を未然に防止することにあつたと見るべきである。「このような行為に走る自分をどうか許してほしい」、「私の煩悶に同情をもってほしい」とする彼の言葉がそのことを示している。

彼は諸教会に宛た書簡で二つの目標を設定した。一つは司教指導下での教会の和合と一致、二つ目はローマ帝国の終末を前提とする「苦難の教会」という成立時の根本理念の保持ということであつた。この中、第一の役割を諸教会の司教に委ね、第二の目標達成には自らの生命を捧げた。彼のこの願いは一応達成された。彼はトラヤヌス治下の晩年、ローマ市で殉教死したとされる^⑤。他方、教会の一致と和合、分派発生の防止という第一の項目も、少なくとも半世紀間は成功の中に維持されたと考えられるからである。後述するが彼が護送の過程で親しく語り合うことの出来たスミルナの司教ポリュカルポスは少なくとも四十年以上にわたって司教として信徒を司牧し名声を得ている。信徒の一人が自発的殉教死を志向し、その監督責任を問われる形でポリュカルポスが逮捕され、正しい意味での殉教者となつたのは、八十六

才の時、紀元一五五年頃であつたといわれる^⑥。イグナティウスの死亡時とされる一一五年から四十年後のことであつた。

しかしイグナティウスの意図したこの二つの目標は、前述のポリュカルポスを殉教に追いやつた二世紀半ば頃を転換期として、部分的ながら破られていく。この時期はモンタヌス、マルキオンに代表される過激な立場に立つ分離・異端派の発生時期であり、またそれと連動する形で展開する自発的殉教者が出現する時期となる。むしろ自発的殉教の事例は分離派にあつても限度があり、正規の殉教例も確認される。その意味で殉教行為そのものが分離・異端派によって担われる傾向が出現した、ということである。ともあれ以下、二世紀に生じた殉教事件のうち、殉教者の氏名、場所、年代が判明し、真実として確認されている事例について概観したい。それは(1)スミルナの司教ポリュカルポスの場合(一五五年頃)(2)プトレマイオスとルキウスの殉教(一六〇年頃、ローマ市)(3)ユスティヌス他数名の殉教(一六五年、ローマ市)(4)リオン市で生じた三十名前後の殉教(一七七年)(5)アフリカ州スキリウムで生じたスペラトゥス他数名の殉教(一八〇年頃)(6)アポロニウスの殉教(一八〇年頃、ローマ市)そして(7)ペルベトゥアとフェリキタス及び数名の殉教(二〇〇〜二〇三年、アフリカ州トゥブルポ)の場合である。

(1) 老齢の司教ポリュカルポスの雄々しい殉教死は教会史に不朽の名を残している。しかし彼の逮捕の状況はやや複雑である。それはひとすらすら死を求め「この不正にして法なき世界から出来る限り早く自由にされんことを望み」自ら当局に名のり出たゲルマニクスなる一青年信者の行為に端を発し、監督上の責任を問われての逮捕であつた。そ

窓 して彼は「皇帝の守護霊にかけて誓い、自説を取消し、キリストを呪

う」という条件で釈放を提言した総督に対し、八十六年間、召使いと

して仕えてきた救世主であるキリストを冒瀆することは自分には不可

能なこと、と回答し殉教したという^④。彼が司教となったのは四十代の

始めと言われているので前述の如く彼は約半世紀にわたりスミルナ教

会の信徒を司牧したことが判明する。更に言えば、一人の過激な信徒

の出現がなければ天寿を全うしえたということである。帝国と正統派

教会との関係は平穩であつたのである。

(2) プトレマイオスが告発されたのは彼の指導で入信した一婦人が

これ以上夫と共に暮すことは「悪の共犯者」になるとして離婚を宣せ

られた夫が彼を弾劾・追究したことに由来していた^⑤。プトレマイオス

そして彼を弁護して有罪とされたルキウスの殉教は従つて自発的殉教

ではない。しかし婦人の師にあたるプトレマイオスが平信徒であつた

ことは明らかであり、未信者との共同生活を不可能とする行為から判

断してこの平信徒グループがモンタヌス、マルキオン派のメンバーで

あつた可能性は極めて高いと判断しうる。

(3) ユステイノスら数名の信者の殉教はローマ市で生じている^⑥。逮

捕の理由は明らかではない。しかし「偶像崇拜にかかわる勅令の布告

の日に彼らが逮捕され、ローマ市長官の下に連行された」という冒頭

の文言が正しいとすれば彼らの場合も自発的殉教者ではなかったと見

なしてよい。しかし集会の場所についての質問に対しユステイヌスが

自分の「ローマ滞在中の住居」という形で回答していること、また信

者の出身地がカパドキア、フリギア等であることから推して彼らがモ

ローマ市にある司教指導下にある教会所属の信徒が逮捕されていな

い、という情況に目を向けるべきである。

(4) ガリア州リヨンとヴィエナで一七七七年に生じた殉教事件は^⑦、そ

の人員が三十名以上に及び女性そして年少者も含まれていた点でこれ

までのものとは異つた性格を持っていた。エウセビウスもこの事件を

特筆して多くの頁を割くだけでなく、この殉教を「祖国のためではな

く真理のために、愛する人のためではなく信仰のために」戦つた並び

もなき卓絶した行為としている。多くの研究者も殉教行為の典型・原

型として讃辞を惜まない。しかし問題点が残る。以下列挙すると①信

者の多くが小アジアからの最近の移住民であること、②中心人物の一

人アッタロスがアジア州ベルガモンの人で平信徒であつたこと③同じ

く女性で中心的役割を演じたブランディナが平信徒であり他郷人であ

つたこと、④リヨン司教区の執事で殉教者の一人となつた九十才のポ

ティヌスなる聖職者が確認されるが、この人物に対する叙述が極めて

短かく目立っていないこと、⑤、④と関連するが司教への言及がばか

され、むしろ司教不在の印象を与える叙述となつていいること、⑥事件

の報告の宛て先がモンタヌス派の本拠地というべきアジア州・フリギ

ア州となつていいること。そして⑦彼らに対するリヨン市民の一致した

反感があつたこと、等から判断して彼らも正統派の教会のメンバーと

いうよりモンタヌス派を中心とする異端派であつた可能性が高いと、

見てよいであろう。エウセビウスはむしろこの事件を正統教会の中の

出来事と見、殉教を教会の栄光を高めるものとし、異端派とは直接結

びつけていない^⑧。しかし彼は少し後の部分でモンタヌス派を含む異端

派が「夥しい数の殉教者を出している」事実を認めている。ガリア州

へのキリスト教の滲透がいつ始まったかは判明しない。最初の言及は一七七年の事件である。しかしガリア教会史が、同年の殉教死を持って始まったとする想定はエウセビウス・テルトゥリアヌスら教会側の史料に見える二世紀当初の拡大の状況を伝える描写から見ても遅すぎるといえる感がある。

(5) 一八〇年、アフリカ州スキリウムで生じたスペラトウス以下数名の平信徒集団の殉教事件は二つの理由でモンタヌス派にかかわる人々の自発的殉教と考えられる。それは史料の冒頭部分に見える①プラエセンスとクラウディアヌスがコンスルの年、カルタゴの市長官の下で尋問が行なわれたという部分——これは逮捕というより、自ら名乗り出た者への対応という印象を与える。②市長官が自分達も宗教的人間でありその宗教の教えは単純であると前置きし、譲歩しつつ皇帝の健康のため祈るよう要請しているのに対し、彼らの回答が極端な二元論になっていること。それは次の如くなっている「我らはこの世の帝国を認めない。私は目をもつて見ず、見ることでできない神に仕える。……私は諸王と全民族の支配者である私の主を認める」。これは「一つの魂は二人の主人、神と皇帝に兼ね仕えることはできない」としたモンタニスト時代のテルトゥリアヌスの発想の実行者であることを示している。

(6) アポロニウスは逮捕の上、処刑された人であるので自発的殉教者ではない。ローマ市で逮捕されているが彼はアレクサンドリアの人であり平信徒であった。彼もまた正統派の教会の外にある無教会派的な人であったのである。その上彼のあだ名となっていたサッケアス Sakkeas がアラム語で禁欲者を意味することから見て、彼が東方系

のグループに属していたことが考えられる。

(7) ペルベトゥアとその召使いフェリキタスの二名の女性殉教者を中心とする数名の殉教者がモンタヌス派の信者であり、教会から突出した人々であったことは、かれらが若い平信徒であり、史料に唯一人登場する助祭は、ペルベトゥアに考え直すよう説得する彼女の父と同じ立場に立ち、通常の司牧活動を続けていることから明白である。娘に対し「白髪に憐れみをもつてほしい——お前が亡くなれば生きていけなくなる子供のことを考えなさい。誇りを捨てなさい」と説得する父、それに同調する長官・助祭をふり切り野獣刑で死ぬ彼女の行為は自発的殉教者の行為そのものと言ってよいであろう。

以上が二世紀にかかわる殉教者の実像である。我々はそのから殉教行為の主たる担い手が教会史家エウセビウスの記述に拘らずモンタヌス派を中心とする異端・分離派ないし無教会的な平信徒集団であったこと、そして数には制約があるが自発的殉教も専ら彼らにより担われていたことを認めてよいであろう。これらの事は「ローマの平和」の時期にあつては当然起るべき性格を持っていたのである。

結 語

教会史上、異端・分離派の発生はそれ自体としては教会勢力の拡大の結果であり、必然性を持っていた。しかし教会の一致と和合を目指す教会にとってそれは未然に防止されねばならない重要課題であった。形成期のキリスト教会の指導者イグナティウス、ポリュカルポスの思想と行動はそのことを示している。彼らの努力は世紀転換後の一時期には成功を見た。しかし二世紀半ば以後それは困難となる。信

窓 徒の急増は必然的に教会の構成員を選ばれた少数集団から混合集団へと変えていく。司牧にあたる司教の力にも限度がある。指導に従わぬ

史 者は排除される。分離派、司教の居ない無教会的集団の発生である。

そしてこれと併行する形でイグナティウスら教会指導者により封印されていた自発的殉教に象徴される自殺的性格を帯びた殉教行為が発生する。二世紀に発生した殉教は直接・間接的には異端・分離派と関わりを持っている。しかしこのことは迫害なき二世紀のローマ帝国の姿を示していると言える。正統教会は異端・分離派とその運動と関わる殉教問題に対しては帝国と同一歩調をとっていた。それはコンスタンティヌス帝時代のニカイアの公会議につながる態度であったと言える。

註

一

- ① A. Nygren, *Agape and Eros*——A Study of the Christian Idea of Love, 邦訳『ヘガペーとエロス——基督教の愛の觀念の研究』I・II 岸・大内訳 昭和二九・三〇年、新教出版社。
- ② 拙稿「いかにしてキリスト教は世界宗教となり得たか——世界国家ローマとの関わりをおつづ——」金沢大学文学部論集・史学科篇 一七・一九七号。
- ③ Plinius, *historia naturalis*, 30, 11, 31, 24.
- ④ Tacitus, *Annales*, 15, 44.
- ⑤ Suetonius, *Nero*, 16.
- ⑥ Dio Cassius, *epitome* 62, 16-18.
- ⑦ Tacitus, *op. cit.*, 15, 44.
- ⑧ Dio Cassius, *op. cit.*, 62, 3, 2 ただし二六七年の出来事である。また相手は全裸にされた少年少女達であった。
- ⑨ Suetonius, *op. cit.*, 16.

⑩ Plinius, *Epistulae*, 10, 96. (国原訳、講談社学術文庫)

⑪ *ibid.*

⑫ *ibid.*

⑬ Tertullianus, *apologeticum*, 37.

⑭ Dio Cassius, 67, 4, 7, Suetonius, *Domitianus* 13.

⑮ Dio Cassius, 67, 13, 4.

⑯ 拙稿「ローマの平和」に関する考察——一・二世紀のローマの軍隊・皇帝崇拜・キリスト教対策を中心に——」金沢大学文学部論集 史学科篇 一五号 一九九五年。

⑰ Dio Cassius, 67, 12, 2.

⑱ 例えばクリント前書七・二二—二九、ギリゴ書 三・二〇。

⑲ ミハネ黙示録一四・八、一七・五。

⑳ Daniel, 8, 23-25, *Oracula Sibyllina* 3, 159-161 後者は旧約偽典。

㉑ マタイ伝二四章、マルコ伝一三章、ルカ伝二一章 など。

㉒ 使徒行伝一章など。

㉓ Suetonius, *Domitianus*, 23, Dio, *epitome*.

㉔ Dio Cassius, 67, 14, 1-2.

㉕ *ibid.*, 68, 1, 2

㉖ F. Josephus, *bellum Iudaeum*, 7, 218, Dio, 15, 7, 2, M. Sardi, *the Christians and the Roman Empire*, University of Oklahoma, 1986, p. 49.

㉗ Plinius, *Epistulae*, X, 97.

㉘ Eusebios, *historia Ecclesiastica*, 4, 7.

㉙ *ibid.*

㉚ *ibid.*, 4, 9

㉛ *ibid.*, 4, 13.

㉜ Tacitus, *Annales*, 15, 44.

㉝ Plinius, *Epistulae*, X, 96.

㉞ E. Gibbon, *the History of the Decline and Fall of the Roman Empire*, Penguin Classics, Vol. 1, Chap. 3, p. 103. 『ローマ帝国衰亡史』中野訳 一・九〇ページ。

㉔ A. Aristides, Oratio 26.

㉕ Tacitus, historia, 1. 1.

㉖

㉗ A. Aristides, op. cit., 26.

㉘ 拙稿「キリシタン・くまのの理型國家像とローマ帝國——「ローマの平和」に関する一考察 金沢大学文学部論集 中巻 13・14合併号 一九九四年。

㉙ Ignatios, Patrologia Graeco-Latina vol. 5. pp. 643-728.

㉚ Ignatios, Epistula ad Polycarpum 7. p. 725-726.

㉛ Ignatios, Epist. ad Romanos 5. pp. 689-692.

㉜ ibid., 4. p. 689-690.

㉝ Tacitus, historia, 1. 1.

㉞ cf. G. W. Bowersock, Martyrdom and Rome, IV. Martyrdom and Suicide, pp. 59-74, Cambridge U.P., 1995.

㉟ Ignatius, Epist. ad Romanos 6. p. 691-692.

㊱ F. L. Cross (ed.), the Oxford Dictionary of the Christian Church, Ignatius, G. W. Bowersock, op. cit., appendix 2.

㊲ The Acts of the Christian Martyrs, Introduction Text and Translations by H. Musurillo, Oxford, 1972, 1, pp. 1-21.

㊳ ibid., 1, Marturion tou hagiou Polykarpou, text, pp. 1-21.

㊴ ibid., 3, Manturion tōn hagiōn Ptolemaiou kai Loukiou, pp. 38-41.

㊵ ibid., 4, Marturion tōn hagiōn Justinou,kai tēs sunodias autōn, 1, 3, 4.

㊶ ibid., 5, Marturion tōn en Lougdounō teleiōthentōn,

㊷ Eusebios, h. e. 5.

㊸ ibid., 5. 1-2. 「ローマの平和」の成立とローマの平和の理想に関する一考察 金沢大学文学部論集 中巻 13・14合併号 一九九四年。 G. W. Bowersock, op. cit., esp. 1, the making of Martyrdom pp. 1-22, W. H. Friend, Martyrdom and Persecution in the Early Church, chap. 1, martyrs of Loyns, pp. 1-30. (1965, Oxford)

㊹ Eusebios, h. e. 5. 16.

㊺ the Act, 6. Passio Sanctorum Scillitanorum, pp. 86-89.

㊻ ego imperium hujus seculi non cognosco;cognosco dominum meum, imperatorem regum et omnium gentium. 「ローマの平和」の理想とローマの平和の理想に関する一考察 金沢大学文学部論集 中巻 13・14合併号 一九九四年。

㊼ Tertullianus, de Idololatria 19, non potest una anima duobus deberi.

㊽ the Act. 7, Marturion tou hagiou Paneuphemou Apostolou Apollō, tou kai Sakkea, pp. 90-105.

㊾ ibid., 8, Passio Sanctarum Perpetuae et Felicitatis, pp. 108-131.

㊿ the Act, Introduction, xxvi.

㋀ ibid., 8, 5. pp. 112-113.